

## 英文学とコミュニケーション

宇佐見太市  
(関西大学)

### 1.

第二次世界大戦後の団塊の世代（第一次ベビーブーム世代）と称せられる世代に属する筆者（1950年2月生まれ）は、専任職としての大学英語教員（専任講師・助教授・教授）をこれまで丸40年間つとめた。筆者は、学生時代には海外留学の経験はいっさい無く、日本の大学、そして大学院（修士課程・博士課程後期課程）でのみ合計9年間、英文学の研鑽を積んだ。その頃すでに、構造主義からポスト構造主義へと文学批評の流れは移行しており、文学テキストは作家個人の天才が産み出したものでは必ずしもなく、過去のさまざまなテキストの幾層にもわたる集積の賜物だ、という西欧の文芸批評理論が当時の私たち英文学専攻者の身近に忍び寄っていた。だからであろうか、時代の変化を敏感に察知した二十代半ばの筆者は、修士論文で研究対象とする英国の国民的作家チャールズ・ディケンズ（Charles Dickens, 1812-70）文学に関しても、執筆の過程で、作者ディケンズの個性や特異性を前面に出すことにいくらか躊躇いがあったことを今でもしかと覚えている。こうした当時の文芸理論の時流に乗るための理論武装として筆者は、熟慮の末、戦略的に敢えてインパーソナルな人文学的アプローチを思案し、主観を排した、客観的な装いのレトリック論として修士論文を仕上げた。21世紀現在の日本の大学院事情とは全く違い、あの頃は事前に指導教授に相談するという風潮や慣習はあまり無く、提出締切日までひとりで苦悶し、気概で修士論文という一個の作品を創り上げた（事前に指導を受けない分、修論提出後の口頭試問が今にして思えば非常に厳格であった）。社会学者・中野収が学園闘争に明け暮れた団塊の世代に対して、「言語文化の呪縛、言語文化の桎梏からの解放によって、感覚能力を復権し、表現行為に固執する若者たち」と評しているが（『朝日ジャーナル』1978年6月16日号／増大号、pp. 29-36.）、言われてみればまさにその通りで、当時の若き筆者は、一種のファッション感覚で、修士論文という自己にとっての愛しい小宇宙の構築・創造という表現行為を、もがきながらもけっこう楽しみながら追求していたに違いない。

その後、英文学研究界には大きな地殻変動、つまりパラダイムシフトが起こった。英文学の作品は、もはやアングロサクソン系の作家だけのものではないという厳粛な認識である。英文学研究と称してアングロサクソン系の言語や精神・文化だけを研究対象にしているのかという疑義である。これまで何の憂いも迷いもなく、たとえばシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）やディケンズといった、いわゆるカノン（正典）と呼ばれるものばかりを基本的に英文学研究の対象としてきた英文学徒の多くは、V. S. ナイポール（V. S. Naipaul, 1932-）等の「英語圏文学」とか「英語文学」とか称せられる気鋭の作家たちの登場にいささか心の動揺を隠しきれなかった。実

際、東京大学大学院教授の英文学者・斎藤兆史も、英文学の解体と正典の崩壊という厳然たる事実を前にして、日本における今後の英語文学教育のありようを斎藤兆史編著『英語の教え方学び方』（東京大学出版会、2003年）で詳述している。また、中京大学教授で、数多くの文芸批評を公刊している英文学者ならびに文芸評論家の榎正行も、誠実な言論人として、榎正行・木村茂雄・武井暁子共編著『土着と近代—グローバルの大洋に行く英語圏文学』（音羽書房鶴見書店、2015年）等の著書に、現代の英文学研究法に対する弥縫策ではない、核心を衝く清冽な論評を多く載せている。こうした昨今の文芸思潮に身を置く私たちは今、根底からこの問題を考究しなければならないが、しかし改めて冷静に考えてみれば、実はすでに19世紀にポーランド出身のジョウゼフ・コンラッド（Joseph Conrad, 1857-1924）というエグザイルの作家がまぎれもなくイギリス文学史に燦然たる足跡を刻んでいた、という事の真実を忘れてはならないだろう。

このたび私たちは、日本出身の英国の作家カズオ・イシグロ（1954-）のノーベル文学賞受賞のニュースに接した。この受賞を予測していた人もあろうが、筆者にとっては予想外の嬉しい驚きであった。カズオ・イシグロの場合、母語がどうのとか、国籍がどうのとかいう、そんなレベルを超えて、英語で書かれた彼の文学作品それ自体が高く評価されたのである。これぞ「英語圏文学」あるいは「英語文学」そのものであろう。

こうした時代状況のもと、私たち世代の英文学研究者のほとんどが信じて疑うことのないようなイングリッシュネスに基盤を置くこれまでの正典としての英文学研究の意義は奈辺にあるのであろうかと、前述の斎藤兆史同様、筆者は呻吟せざるをえない。この問題に真正面から向き合ってこなかった筆者は今、悔恨の情に苛まれながらも、しかしながら、今回のノーベル文学賞受賞者カズオ・イシグロ自身の読書遍歴を辿ることによって、イングリッシュネスを信奉してきた筆者の悔悟の念は、ほんの少しは払拭されるのではないかと思う。

両親が日本人であるカズオ・イシグロは、5歳のとき父親の仕事の都合で一家そろって英国にわたり、1983年に英国籍を取得している。彼は、コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle, 1859-1930）、ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）、そしてシャーロット・ブロンテ（Charlotte Brontë, 1816-1855）等の19世紀の英国作家の諸作品に耽溺したことを読者の私たちに吐露している。言うまでもなくこれら一連の作家の諸作品は、まさしく「正典」と言われるものである。カズオ・イシグロにとっては、作家修行のためだけでなく、自らの英語習得のためにもこれらの作品読解は非常に役立ったとのことで、いまだにヴィクトリア朝時代の英語、たとえば‘Pray be seated.’といった表現が口について出てくる、と彼は漏らしている。

ところで、カズオ・イシグロのこのような読書遍歴からの連想だが、英語を話す日本人が現在よりもはるかに少なかったであろう明治の時代にあつて、たとえば内村鑑三（1861-1930）や岡倉天心（1863-1913）などは、どうして英語の達人になりえたかを考えた際、彼ら明治の英傑は、翻訳本ではなく、本来の英語そのものと必死に格闘したからではないか、と筆者は考えている。明治の先達は、ひたすら原書を読み、それを自家薬籠中のものにしていったのではないだろうか、と思料する。これは、原書と真摯に対峙したカズオ・イシグロと同じ学習態度であったと思われる。

現在、世の中全体の風潮として、たとえば教育界や実業界においては、問題

解決能力育成といった呼び声が喧しい。もちろんその能力は、実社会で生き抜く力として若者にとっては必須のものであろう。ただ、英語英文学専攻の大学のひとりの英語教師として、ひたすら愚直なまでに英文学作品を一字一句ていねいに精読する訓練を教室で実践している筆者は、即戦力養成もさることながら、たとえ地味な作業と言われようが、じっくりと時間をかけて原書を読むという訓練を通じて、学生に英語読解力と忍耐力をも同時に体得させてやりたい、と願っている。後者の忍耐力に関しては、精神科医・帯木蓬生の著書『ネガティブ・ケイパビリティ 答えの出ない事態に耐える力』（朝日選書、2017年）のまさにサブタイトルの「答えの出ない事態に耐える力」と同種のものと言っても良いだろう。

現代の若者たちの一部には、自ら勝手に作り出した固い殻の中に精神的に引きこもりがちなる者もいる。彼らは本能的に、しにものぐるいで外界から身を守ろうとしているのではないだろうか。自己主張が強く、即座に受け答えが可能な、そんな元気潑刺な外向的な人間がややもすれば席卷しがちな英語教育界にあって、自己主張が弱く控えめで内向的なおとなしい若者にとっては、てきぱきとした受け答えを瞬時に要求される学校でのオーラル・コミュニケーション的な英語の授業は苦痛でも、逆に、たっぷりと時間をかけて文学作品とゆったりと落ち着いて向き合い、一字一句の英文を熟読しながら和訳するという、いかにも地道で愚直な作業は、けっこう相性がいいかもしれない。一見したところ時代遅れに感じられるこうした昔ながらの地味な英文読解授業を通じて、内向的な学生が、迷路からやっと抜け出した時に味わう、あの解放感と喜びと言ってもいいものを体得するのを長年にわたって筆者は経験してきた。こうした経験から、要領よく生きるのが苦手で、授業中の教師やクラスメートとの機敏な問答で遅れを取り、それゆえに精神的な苦境に陥りがちな若者にレジリエンス（元気の回復力）の機会を与えてやりたいという想いを抱くに至った筆者は、この種の昔ながらの地味な英文読解授業が必ずや学生の英語基礎力養成にもつながり、同時に、根気よく問題解決に当たるといふ忍耐力の涵養にも寄与するであろうと信じつつ、教室で英文学作品の精読授業を粛々と実践している。

## 2.

チャールズ・ディケンズの晩年の短篇小説“Holiday Romance”（「ホリデイ・ロマンス」、1868）は、Part IからPart IVまでの4篇から成り、それぞれ6歳半から9歳までの子どもたちが書いた物語である、という設定の作品である。子どもの視点から大人の世界を描いたものと言えよう。本稿では、Part IVのMiss Nettie Ashford（ネティ・アシュフォード）という名の6歳半の少女が書いたという体裁の小篇を取り上げたい。本作品の翻訳としては、杉山洋子他訳『ディケンズ（Charles Dickens）ホリデイ・ロマンス』（株式会社編集工房ノア、2000年）が存在する。翻訳の際に杉山洋子他が用いたテキストは、ディケンズ主宰の週刊雑誌*All the Year Round*に1868年1月号から4月号まで連載されたものゆえ、筆者もそれに合わせて、1868年4月4日発行の週刊誌版に載ったものを使用した。原題は“Holiday Romance. By Charles Dickens. In Four Parts. Part IV. Romance. From The Pen of Miss Nettie Ashford.”だが、杉山洋子他訳の翻訳書は、そのストーリーに鑑みて、「さかさま国のお話・大人の学校 ネティ・アシュフォード（6.5歳）作」という題

名を付けている。子どもたちが大人たちを寄宿学校に預けてしまうという、現実とは全く逆の奇想天外な夢物語である。現実社会とはあべこべの、子どもが好き放題して楽しく暮らせる、そんな夢の楽園が描かれている。それゆえに一見したところ、少年少女向きの児童文学の範疇にきちんとおさまる作品のようではあるが、しかしながら、英文それ自体は日本の大学の英語学習者にとっては必ずしも容易ではないと、筆者には思われる。現に教室で本作品を使用した際、身を以てそのことを体験した。我々にとって決して平易とは言えない、こうした英文の読解例を以下に列挙しながら、教室での英文解釈の模様を再現してみたいと思う。

- (1) The grown-up people are obliged to obey the children, and are never allowed to sit up to supper, except on their birthdays.

下線部分に関して上記の翻訳書では「晩ごはんまで起きててもいけないのよ」となっており、もちろんこの和訳は正解なのだが、ただしこれについてはいくぶん時代背景的な説明が要るのではないだろうか、と筆者には思われてならない。当時は、大人の時間と子どもの時間は厳密に分けられていて、誕生日のような特別な日を除いて子どもは普段、子ども部屋等で大人とは別に食事を与えられ、そのまま早々と寝かしつけられたのである。子どもは大人と一緒に **supper** の席には着けなかったのである。実際、子どもが悪いことをした時の子どもに対する親の御仕置きの一つは、子ども部屋で何もしないで寝るように強要することであった。子どもはときには食事も与えられなかったのである。こうしたことを踏まえ、うえてこの英文を読めば、子どもと大人が逆転した設定のこの物語の **the grown-up people** の悲哀が、読者には身にしみて感じ取れるであろう。現に、この種の場面は、たとえば C. S. ルイス (C. S. Lewis, 1898-1963) の『ナルニア国ものがたり』(*The Chronicles of Narnia*, 1950-56)7部作のうち、第6番目出版された“The Magician’s Nephew”(1955)や、L. M. モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942) の『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908) などにおいて、私たちには馴染み深いものである。

- (2) Her parents required a great deal of looking after, and they had connexions and companions who were scarcely ever out of mischief.

下線部の意味は、翻訳書の和訳に従えば、「いつもいたずらばかりしている」であり、もちろんこれは正解で、何ら問題はない。ただ、日本の英語学習者のなかには、なぜそのような意味になるのかわからない者もいるようである。そこで英語教員は教室で、‘scarcely ever’は「ほとんど～でない、きわめてまれだ」の意味だということをもまず学生に確認させ、そして、‘out of mischief’は「ほんのいたずら心で」の意味だと教え、直訳すれば「ほんのいたずら心から、ではまずない」、つまり「ほんのいたずら心どころではない」となり、結局のところ上記の翻訳本の通り、「いたずらばっか

りしている」の意味になるのだ、と教授する。実際、物語の文脈から言えば、この意味にしか取れないので、直観的に正しい意味を瞬時に掴みとる語学的センスのある学生もいるだろう。

(3) Mrs. Orange stood upon the scraper to pull at the bell, and gave a Ring-ting-ting.

この箇所は、‘bell’が今で言う「ベル」ではなく、「呼び鈴」であることを知っていなければならない。だからこそ、‘pull at the bell’という表現になり、「呼び鈴をぐいと引っ張る」という意味になる。ここでは当時の‘bell’に関する知識が求められる。

(4) “Then pray have you,” said Mrs. Orange, “have you any vacancies?”

‘pray’については、カズオ・イシグロに関する件りで既に上述した通りであるが、まさにヴィクトリア朝時代に使われた英語である。命令文や疑問文で、副詞的に用いられ、今で言う‘please’に相当する。この‘pray’については、あとで再び、‘Pray stay to dinner.’という表現が出てくる。

また、‘have’の用法に関してだが、現代英語であれば一般的に‘Do you have any vacancies?’のように代動詞doを使って表現するが、テキストのような英語表現もあることを授業で指摘する。現に、1962年から1965年にかけての筆者の大阪市立天王寺中学校時代には二通りの表現があることを教室で学んだ。まるで助動詞のような‘have’の使い方だと、当時は思ったものである。

(5) Go along with you, sir. This is Brown, Mrs. Orange. Oh, a sad case, Brown’s !

この物語は、既に述べたように、大人と子どもがあべこべになったという体裁の話である。本来は大人なのだが、まるで子どものような扱いをされて寄宿学校に入れられているBrownという名の男性に向かって、本来は子どもであるレモン先生は、「勝手にしなさい、あっちへ行きなさい」と言うのだが、その際、オレンジ夫人に話すときは、その男性の事をBrownと呼び捨てにしているにもかかわらず、実際に彼本人に話しかけるときは、‘sir’という語彙を用いているところが面白い。実はこの種の表現は、以後、何回も出てくる。また、‘a sad case’は、「しまつにおえない人」という意味であることに留意しなければいけない。

(6) “You must have a great deal of trouble with them, ma’am,” said Mrs. Orange.

この助動詞‘must’は、「必然性・推量」の意味の‘must’で、「～にちがいない、どうみても～と考えられる、きっと～だ」という意味合いで、話者の強い確信を表している。この助動詞の働きによって、話者の話の確信度がかなり高いことを示している、と読者は認識すべきであろう。

(7) “Well, I wish you good morning, ma’am,” said Mrs. Orange.

これは、人に別れの言葉を述べるときの表現である。「さよなら」とか「じゃ、ごきげんよろしく」という意味で、いくぶん尻上がり気味に発音する。この場合には当てはまらないが、文脈によっては、嫌な人と別れるなど少し皮肉交じりのニュアンスが入ることもある、と敢えて学生に教えることも必要だろう。

(8) “Those troublesome troubles are got rid of, please the Pigs!”

この表現は、‘please God’ という慣用語句の代用としてふざけて言う場合に用いられる。‘Pigs’ の P は小文字にもなりうる。「都合よくいけば、場合によったら」の意味である。

(9) Mr. Orange here came home from the city, and he came too with a Ring-ting-ting.

この‘the city’は、「ロンドンの金融・商業の中心地である the City of London」を具体的に指している。翻訳書では、「さてここへ、オレンジ氏がお勤めから帰ってきて、呼びりんをリンリンリンと鳴らして入ってきたの。」となっている。

(10) “James, love,” said Mrs. Orange, “you look tired. What has been doing in the city to-day?”

この‘love’は、呼びかけに用いる口語的な用法で、「愛しい者」という意味の名詞である。「ジェイムズ、ねえあなた！」とでも訳せばいいだろう。

(11) “Hear, hear, hear!” while other boys cried. “No, no!” and others “Question!” and all sorts of nonsense that ever you heard.

実際は大人だが、子どもという設定のこの物語において、その子どもたちは議会ごっこをやり始める。‘Hear, hear, hear!’（「拝聴！拝聴！拝聴！」、すなわち、「そう

だ、そうだ！その通りだ！）」のあと、‘No, no!’（「意義あり！意義あり！」）、そして‘Question!’（「質問！」）と続き、最後に‘Spoke!’が来るが、この語の意味は「妨害、邪魔」（=obstruction）であり、「議事妨害だ！」と和訳できるだろう。

(12) But at last Mrs. Alicumpaine said, “I cannot have this din....”

‘this din’は、「このような騒々しさ、騒音」の意味であり、‘have’は、「許す=permit」とか「我慢する=tolerate」の意味である。翻訳書は、「ああ、うるさい、もうだめ。」となっている。学生には例文として、‘I can’t have his audacity.’（「彼のずうずうしさには黙ってられない」）などを示せばいいと思う。

(13) “I quite adore them, ma’am,” said Mrs. Orange, “but they DO want variety.”

‘want’は、本来の意味が「～に欠けている、足りない=lack」であることに注意しなければならない。翻訳書の和訳「だけでももう少しいい子がいてもいいのにね」は、的確な意識である。

(14) “I adore them, James,” said Mrs. Orange; “but SUPPOSE we pay her then!”

この‘suppose’は、「提案」を表す‘suppose’で、「もし～したらどうか」の意味である。「それじゃ、彼女にお金を払ってしまったら？」、つまり、「彼女にお金を払いましょう」の意味となる。例文として、‘Suppose (=I suppose) we go to the movies tonight.’（「今夜、映画はどうだね？」）を学生に提示すればいいだろう。

実は上記の英文例以外にも、本作品には、他動詞的に形容詞として用いられる‘tiresome’（「～をいらいらさせる、～を退屈させる」）、‘delightful’（「～を楽しくさせる、～に喜びを与える」）、‘trying’（「～を疲れさせる、腹立たしい、苦しい、つらい」）、‘wearing’（「～を疲れさせる、うんざりさせる、腹立たしい」）、そして‘vexing’（「～をいらだたせる、困らせる、やっかいな」）などの語彙が頻出する。さらに、助動詞‘would’に関しては、「過去時における固執や拒絶」の意味用法が何度も出てくるので、教室ではそれらについての丁寧な文法的説明が必要となる。このように、原書を精読する授業では、英文の一字一句を慎重に吟味・検討し、味読していかなければならない。英文学者・佐々木徹（京都大学大学院教授）は、「今、日本で、英文学にどう取り組むか？」と題するエッセイで、「英文学を研究するに際して、われわれ日本人は英語を母語とする研究者にスタート時点で大きく差をつけられている。だが、懸命に努力すれば対等に渡り合えないはずはないし、不利を克服した快感は格別の励みになる。わたしに言わせれば、逆境をはねのける最善の方法

は精読である。われわれは日本語の本をさっと読み流してしまう。英語を母語とする研究者の読みも往々にしてそういうものだ。だから、われわれは英語をひたすら丁寧に読んで勝負する。読む量でかなわなければ、質で対抗する。今、真に国際的な学問に至る一つの近道はそこにあるのではないだろうか」（日本英文学会（関東支部）編、『教室の英文学』所収、研究社、2017年、p. 8.）、と持論を吐露しているが、筆者もこれと全く同じ想いで、教室に臨んでいる。

さらに具体的な例として、本文中に‘connexions’（「親類、縁者」の意味）という語彙が出てくれば、この綴り字の特異性に注目する。‘to-night’であれば、‘at night’（「夜に」）の意味であることを教える。また、ディケンズの作品を読むときには、その時代特有の俗語にも目を向けなければいけない。その際、筆者が重宝しているのは英語学者・市河三喜が物した『英文法研究』（研究社、1954年）所収の「第二編 ディケンズと俗語の研究」である。さらにディケンズの作品と接していて筆者がいつも痛感することは、彼の文体は雅俗混淆であるということだ。ディケンズ自身、独学でたたきあげた人ゆえ、そこには教養人の文体もあれば、一般庶民の文体もあるといった具合で、ごった煮の面白さに満ち溢れている。これこそ、ディケンズ文学愛好家にとっては至福以外の何物でもない、と筆者は固く信じている。

### 3.

筆者は、英国の作家の小説、それもたとえばチャールズ・ディケンズ作の古典を教室で取り上げてはいるが、筆者のクラスには英文学者を目指している受講生など皆無であることは百も承知している。それゆえに彼らには、アマチュアリズム、すなわち文学愛好家の平常心で文学作品と素直に向き合い、その文学教育的営為を通して最終的に英文読解力を修得して欲しいと切望している。現に1952年（昭和27年）、英文学者・鍋島能弘は、当時の若者に向かって次のようにアマチュアリズムを鼓舞している：「…若い読者に述べたいのは、明治の時代のイギリス文学黎明期のことである。強ち回顧趣味ではないけれども、あの自由闊達な文化開拓の時代には、曲りなりにもイギリスの文学を解し、親しんでいる人たちが多かった。いわゆる学究的には正確でないけれども、作品の雰囲気や作家のスタイルといったものを、勘よく掴む人々がいたのである。漱石は云うに及ばず、たとえば透谷にしても、独歩にしても、その片言隻句のうちにイギリスの芸術的なもの美的表現を宿していたところもあるようだ。」（鍋島能弘、『英文学の教養』（創藝社、1952年、p. 175.）。この鍋島能弘と同様の想いを筆者も抱いている。

日本の英語教育、特に中学校レベルにおける「コミュニケーション」重視の時代の幕開けは、1989年（平成元年）である。当時の文部省発令の「学習指導要領」に片仮名の「コミュニケーション」なる語が登場し、その勢いはまたたく間に高等学校や大学にも波及し、現在に至っているが、この風潮に憂いを抱いた「日本学術会議 言語・文学委員会 文化の邂逅と言語分科会」は、満を持して、2016年（平成28年）11月4日付けで「提言 ことばに対する能動的態度を育てる取り組みー初等中等教育における英語教育の発展のためにー」を公表した。これは、実用性を重視する英語教育だけではなく、ことばの仕組み・構造や働きそれ自体にもさらにいっそう関心を向けさせるべきではないか、という提言であ

る。その際、話し言葉ばかりではなく、書き言葉の活用の利点にも言及し、さらには、母語と目標言語との関連性をしっかりと認識することの大切さをも強調している。この提言は、現状の日本の英語教育界に一石を投じたと言えるだろう。

日本の言語教育を考えるに際して、古典教育と外国語教育双方の融合を目指す英文学者・平川祐弘（東京大学名誉教授）は、「古典」について以下のように述べている：「古典とは何か。風土と歴史に根ざしながら、時と所をこえてひろく享受されるもの。人間の叡智の結晶であり、人間性洞察の力とその表現の美しさによって、私たちの想いを深くし、心を豊かにしてくれるもの。いまでも私たちの魂をゆさぶり、「人間とは何か、生きるとは何か」との永遠の問いに立ち返らせてくれるもの。それが古典である。」（平川祐弘著「地球化時代の英語学習と『源氏物語』の邂逅』『諸君！』文藝春秋、2009年4月号所収、p. 120.）。現代日本の英語教育への問いを射程に入れた雄渾な筆致の平川祐弘の論述を傾聴するに如くはないだろう。現に、ロシア語会議通訳者ならびに作家として活躍した米原万里（1950-2006）も、「文学こそがその民族の精神の軌跡、精神の歩みを記したもので、その精神のエキスである」（米原万里著『米原万里の「愛の法則」』集英社、2007年、pp. 179-180.）、と述べている。

また、言語学者・ジョージ・スタイナー（George Steiner, 1929-）も、著書 *Language and Silence*（Faber & Faber, 1967）において、英米の英文学研究界の惨状を嘆きつつ、古典への関心と素養の蘇生を祈願する。英文学研究の本場、英米でさえ今や危機意識が英文学界を覆っているようである。著者のジョージ・スタイナーは、この状況を打開するためにはひたすら古典を読むことに尽きる、と主張する。

アメリカの構造主義言語学を主導したエドワード・サピア（Edward Sapir, 1884-1939）は、古代ギリシア哲学以来の連綿と続いてきた伝統的な知性／理性生得説の流れのなかにあつて、人間はことばによって初めて思考するという、言語が思考の基盤であるとする立場を表明した。その後、人間には言語を話す能力が生得的に備わっているとする生成文法理論の生みの親であるノーム・チョムスキー（Noam Chomsky, 1928-）が登場したが、筆者はサピアの主張に同感の念を抱いている。ところでそのノーム・チョムスキーであるが、1999年の暮れに行われた彼への長編インタビュー本（田桐正彦訳『チョムスキー、世界を語る』株式会社トランスビュー、2002年、p. 146.）のなかでチョムスキーは、特定の人物を神格化することには真っ向から反対し、個人の名を冠した学説や理論は、もうそれだけで疑わしいものに見えてしまう、と言っている。まさにラディカルな知識人としての面目躍如である。筆者もその意見には賛同する。

言語と思考の問題や個人崇拜の学説・理論のことなど、これらはどれも筆者にとっては峻厳な課題である。こうした根源的な問いを常に突きつけてくる知の巨人たちの深甚な言説に絶えず耳を傾けながら、欧米的普遍からほど遠い渺たる極東のはての日本にあつて、筆者の英語英文学教育の果敢な試みは常に道半ばの感あり、である。なぜなら、筆者の青春時代（中学時代は東京オリンピック、その後は EXPO'70 など）から現在に至るまで、日本の経済界ならびに教育界は、常に役に立つ実用英語教育を標榜し続けている。現に数年前の2013年にも、文科省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表した。このように実用性や有用性とかいう言葉や概念を前面に押し出されると、気の弱い筆者などは沈黙してしまわざるをえなくなる。でも一方で、こうした実用英語偏重が果た

して今後いつまで続き、この流れが本当に現代の若者たちにとって幸せをもたらすのかという、いわく言い難い思念が筆者の脳裏に纏わりつく。

ただ、念のために付言しておくが、筆者は決して世間で言うところの実用英語をないがしろにしているわけでは決していない。実際、筆者のここ二十年來のライフワークは、「英語教育の応用篇としての英文学研究のありよう」の論究である（Cf. 拙書『実践知性としての英文学研究』関西大学出版部、2014年）。作品と読者の、作者と読者の重層的な「コミュニケーション」の探求を筆者は志向しているのである。人間と人間の「コミュニケーション」の複雑さ、奥の深さを認識するためには、英文学作品の有効的活用もありうるのではないかという筆者の信念に基づいての考究である（「コミュニケーション」に関しては、突き詰めれば、社会言語学の領域とも重なるだろう。現に言語学者・田中克彦は著書『ことばとは何か—言語学という冒険』（ちくま新書、2004年、p. 174.）のなかで、「倫理の問題であり、人権の問題であり、人類と文明の未来にかかわる広くて深い人間学的問題である」と述べているが、言い得て妙である）。筆者は、教室で、英文学作品の精読を通じて言葉の持つ魔力にどっぷりと身を浸しながら、究極的には「コミュニケーション」の醍醐味を若人に感得して欲しいと願っている。そのためのひとつの手法として筆者は、地道な英文読解作業を実践し、学生には「知」だけではなく、「知」と「徳」の両方を修得させたいと願いつつ、精読授業の研鑽を長きにわたって積み重ねてきた次第である。

政治学専門の東京大学名誉教授・三谷太一著『学問は現実に関わるか』（東京大学出版会、2013年、p. 234.）からの以下の引照は、筆者には学問のありかたを考究するに際しての千鈞の重みを持つ犀利な至言と思われる：「学問が現実と関わる際に、学問を現実媒介するのは学問を支える価値観であり、また価値観に基づく価値判断である。学問的客観性だけでは現実には動かない。しかも価値観と結びついていない、単なる学問的客観性にはありえない。そして価値観に生命力を吹き込むのは具体的な価値判断であり、その主体である人格である。それが学問の主体に他ならない」。

これまで日本の経済界を先導してきた鉄鋼・造船・家電等の業種の多くは、急速なグローバル化の流れのなかで今まさに苦境に瀕している。GDP（国内総生産）も2015年には世界ランク20位になった。現代日本の若者にとって今ほど過酷な状況は、過去に類がないだろう。私たち大学の英語教員が現在なすべきことは何なのか。肚をすえてかかるべき時が来たのではないだろうか。もちろんそれぞれが信ずる道を進めば良いわけだが、願わくば私たち英語教師は、閉塞感漂うこの社会の「再生」を目指して、己をむなしゅうし、無私精神で一陽来復の春を希求したいものである。事々しいことは筆者の意に染まぬことだが、本稿で述べた筆者のささやかな英文解釈の授業実践例を通じて、言語、文学、文化、民族、歴史、そして思想等に柔軟に思いを馳せることのできる、そんな外柔内剛の人間を育成してゆきたいと思う。そして彼ら若人が多事多端な時代を乗り切ってくれるであろうことを祈願し、筆を擱きたい。